御蓋山

春日大社の東に立つ山で、春日大社を含む御蓋山はユネスコの世界遺産に指定されています。

御蓋山には、奈良が日本の首都だった奈良時代（710〜784）の初め頃、茨城県の鹿島神宮より守護神の武甕槌命（たけみかづちのみこと、雷の神）が白鹿にまたがり御蓋山の頂上に到着したと言われています。

768年に、武甕槌命と別の三柱の神、経津主命（ふつぬしのみこと、剣の神）、天児屋根命（あめのこやねのみこと、知恵の神） 、比売神（ひめがみ、天児屋根命の妻である女神）が御蓋山の中腹に創建された社殿に併せて春日大社に祀られました。これにより、人々は霊山の頂上まで登らなくとも、これらの祭神と御蓋山を拝むことができるようになりました。

ここは奈良時代より狩猟や木の伐採が禁じられているため、御蓋山は日本で最も美しく、保存状態の良い原始林の一つとなっています。この森は、ヒメハルゼミなど貴重な動物種の住みかでもあります。御蓋山はまた、奈良市と春日大社の重要な水源です。今日の奈良公園の流れの中には、これらの神聖な川から流れ込んでいるものが多くあります。

ここは奈良時代より狩猟や木の伐採が禁じられているため、御蓋山は日本で最も美しく、保存状態の良い原始林の一つとなっています。この森は、ヒメハルゼミなど貴重な動物種の住みかでもあります。御蓋山はまた、奈良市と春日大社の重要な水源です。今日の奈良公園の流れの中には、これらの神聖な川から流れ込んでいるものがあります。